
殺人犯の彼女。

奥田徹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人犯の彼女。

【Nコード】

N4301T

【作者名】

奥田徹

【あらすじ】

「私は人を殺したの」と彼女が言った。

「私は人を殺したの」

海が見渡せるただっ広い公園で、ゴミ入れのカゴから沢山のゴミが溢れ出ていた。お弁当の空箱や、空き缶、ペットボトル、ビニールを縛った物。

気になったのは、そのゴミ入れだけで後は比較的綺麗で居心地のいい公園だった。遊具もなく、ただ少しの距離を置き、腰掛けが二つ並んでいる。

腰掛けには背もたれがなく、海側をみる事も、反対に座り公園を眺める事も出来た。

公園はゴミ入れと、隅っこに新しめの公共トイレ、数本の木が周りを囲むように生えていた。

2

彼女の提案で僕達は、乗った事のない電車に乗り、知らない駅で降りてみようと言う事になり、東海道線に乗り、真鶴で降りた。

海を見ながら彼女が言った。

「私は人を殺したの」

彼女はそう言うと、ニッコリ笑い、僕の顔を覗き込んだ。

「そういう事にしない？」

「で、君は人を殺したの？」

「それを確かめるのがあなたの役目なの」

つまり、彼女は人殺しの疑いがあり、僕はそれを確かめる為にここにいて、事が今日のデートのテーマになった。

僕はたまに、そういう遊びをしながら時間を過ごす。

「で、どれくらい疑ってるの？私の事」

「疑ってはいない。ただ殺してないのを確認する為に君と一緒にいるんだ。」

「なぜ？」

「僕は君の恋人だから」

「理由はそれだけ？」

「足りないかな？」

「じゃあ、私もし殺してたらどうするの？」

彼女はそう言うと、立ち上がり、遠くの海を見つめた。少しだけ強い風が通り過ぎた。

「その時は、君が望むようにするよ。」

一緒にいたいと言えば一緒にいる。

死にたいと言ったら一緒に死ぬ。

どこまでも逃げたいなら、どこまでも逃げる。」

「…ふん」

彼女は、信じないわ、そんなのでも言いたげな表情をしながらゆっくり歩き出した。

それに続き、僕も歩き出す。

「…だったら、私は殺したわ〜！」

彼女が腕を大きく振りながら、楽しそうに大股で歩き、大声で言った。

「殺したの〜？」

僕も大声で聞き返す。

「殺したの。とつても残虐に、血が飛び散って、体中から、何から血だらけになったの。気持ち悪かった。」
車通りの少ない道。多少大袈裟な身振りを交え、楽しそうに彼女が答える。

「何でそんな事したの？」

「何で？…解らない？」

「解らない。」

彼女は立ち止まり、クルツと振り返り、僕を真つすぐ見つめた。

そして、ニコツと笑うと、いきなり全速力で反対側に走り出した。

僕は暫く見つめ、追いかけた。

町に出ると、幾つかの角を適当に曲がり、まだ残ってる木造の鄙びた駄菓子屋に入ったり、ペンキ屋の前に置かれた、錆びて茶色がかったドラム缶の中を覗いたりした。

「ここに死体入れられるわね」

「あと二人は殺せる」

車通りが多くなった道の先に大きな病院が見えた。

彼女は病院の前に来ると、暫く立ち止まり、

「ねえ、本当に人が死ぬところ見てみたくない？」

「どういう事？」

僕の問い掛けを聞き終わるか、それ以前、彼女はツカツカと病院へ歩を進めていた。

まさか、誰か死にそんな人を探すと言うのだろうか？

「ちょっと、止めようよ。」

「あなた、どこへでも付き合っただけでしょ？ 私に」

「変な事しないよね」

「殺人犯に何聞いてるのよ。」

彼女は当たり前前の顔をして病院の玄関の自動ドアを入り、

数人がどんよりと待つ受付の横を通り抜け、

迷いのない足どりで、階段を上った。

病院の湿気と薬が混ざったような臭いが、

僕の緊張と罪悪感を高め、軽い尿意を感じさせた。

左側にガラス窓、右側に入院患者の病室がある廊下。幾つか開いたドアから入院患者を確認出来た。

カーテンが閉めてあったり、ベットに横になっている人。沢山の医療器具に囲まれている人。

そこには、ある種の生々しさがあり、ただブラブラ用もなく歩くにはかなり抵抗があった。

彼女は廊下をゆっくり歩き、開いた病室の中を一つ一つ覗きながら、通り過ぎていく。

ふと見ると彼女の姿が消えていた。

「え？」

僕は、少し慌てて、病室を丹念に確認し彼女を探した。

彼女は大部屋に一人きりで寝ている老婆のベットの横に腰掛けていた。

「いた…」

と、僕が声をかけようとする、彼女は、

スッと人差し指を口に当て、僕の発言を制止した。

その動きはとても自然で、僕は全ての雑音が唐突に消え失せ、この

病室が一瞬のうちに静寂に包まれたような錯覚に包まれた。彼女は、僕を見つめると、こっちに来て座りなさいと、目で合図した。

僕は、不謹慎で何かいけない最中にいる気がして、足が震えた。その足を進め、彼女の横に行き、丸椅子に座った。

「ねえ…」

彼女は吐息の様な声で僕に言った。

「息をしているのよ。」

僕は彼女が見つめる視線の先を追った。

そこには見知らぬ老婆の寝顔があり、表情は割と穏やかで、

規則的な寝息をしていた。

静寂の中、その老婆の寝息だけが全ての音の存在のように、耳を打ち、

その空間に生命を感じさせた。

「本当だね…」

僕達は暫く、その病室で寝ている老婆の顔を眺め、病院を後にした。

駅に戻る帰り道、彼女が僕に聞いた。

「どう？私は殺人犯か解った？」

「僕は初めから疑ってないよ。」

「なぜ？」

「僕は君の恋人だから。それに…」

「それに？」

「息をした。」

彼女はニコツと笑い。

「そうね、まだ息をしてた。死んでない。凄いなね」
「うん、凄いなね。」

夏の匂いがした5月。

殺人犯でない事が幸せだった。

(後書き)

朝家を出る時はどんよりな話を書こうとしてたんすが…むむ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4301t/>

殺人犯の彼女。

2011年5月21日17時24分発行